

北海道分布のホッスモと弁天沼の水生植物

外山雅寛

はじめに

筆者はこれまで、主に道内の *Utricularia* の分布調査を中心として手がけてきたために、他の水生植物の分布については多数のものを見過ごしてきている。

本稿では、たびたび *Utricularia* の調査を行ってきた弁天沼で見かけた水生植物について報告したい。

この沼の水生植物についての本格的な調査は1993年より実施する予定で、現在のところ1部分の植物を除いては実証標本の採集に至っていないことをお断わりしておきたい。

弁天沼について

弁天沼は、勇払郡苫小牧市東部、安平川の下流に位置する沼で、古い地図を見ると、かつては安平川と続いていたことがわかる。日高本線勇払駅北東約4 km。沼の北部及び南部の周辺部は泥炭湿原となっている。

第2次大戦後は沼の周辺部に入植があり酪農地帯となったが、経営に行きずまり、現在では周辺部のかつての牧草地が放棄されたままとなっている。

沼の最深部は1.5m、集水面積は16 km²である。水位の変動が激しく、豪雨の時は著しく増水する。これがために周辺には高層湿原は存在していない。北部には柏原湿原があり、さらに北西部にはラムサール条約登録湿地として有名なウトナイ湖(ウトナイ沼)がある。

水草の種類が極めて豊富で小面積をくぎった中で、多種のものを見出すことができ多様性に富んでいる。

現在のところは非常にすばらしい

環境であるが、本沼も苫小牧東部工業開発地域に含まれること、千歳川放水路がこの辺を通る可能性が高い等大きな問題をかかえているのが現状である。

北海道新産の水生植物—ホッスモと本道分布既知のNAJADACEAE

これまで北海道からは、ホッスモ *Najas graminea*

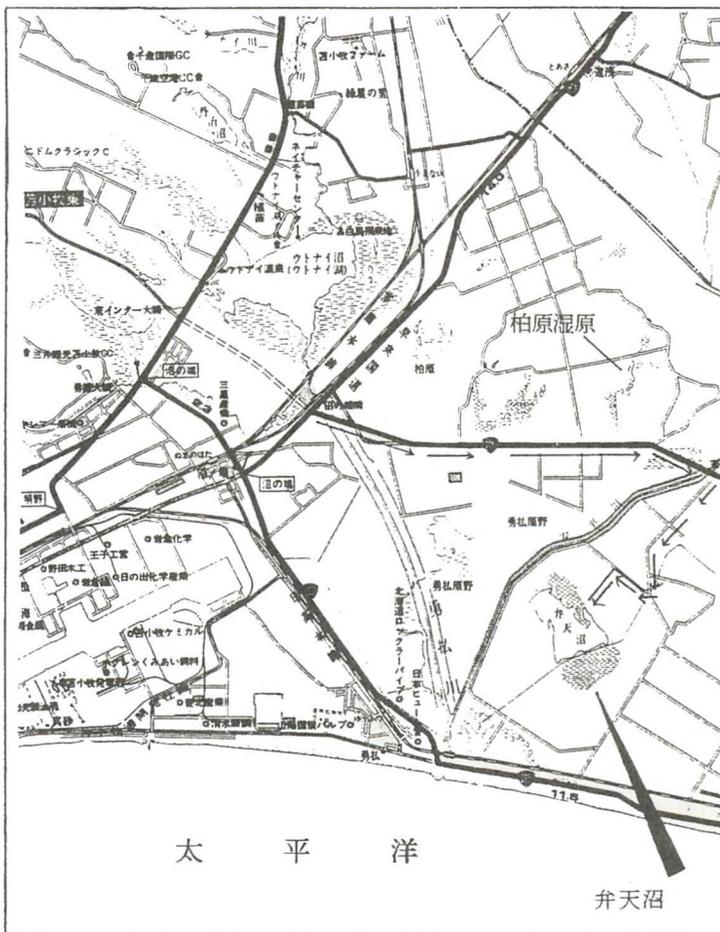


図1 弁天沼の位置

Del. は記録されたことはなかったが、北海道に確実に分布することが現物の採集によって実証されたので、北海道新産の水生植物として追加したい。標本のデータは次の通りである。

《北海道新産植物ホッスモの標本》

採集地：北海道勇払郡苫小牧市弁天沼

1992. 9. 23 (採集者：外山雅寛)

同定：神戸大学教養部 角野康郎博士

収蔵：神戸大学教養部標本庫 (1個体分)

従来の記録では、北海道からの記録は全くなく、上野雄規 (1991) によると北本州での分布については南部から北は青森まで連続分布となっており、これまでの知見では、青森県が北限であった。

弁天沼については、まだ極く一部分の区域を踏査したに過ぎないが、本種ホッスモは弁天沼東岸の水深20-25 cm位の所に、株は飛散的、恒常的に出現している。西岸部は全く調査していない。

《北海道産 NAJADACEAE イバラモ科植物の全種》

今回の北海道新確認のものを含めると道内で記録されたイバラモ科植物は、ホッスモ *Najas graminea* Del., イトリゲモ *N. japonica* Nakai, イトイバラモ *N. yezoensis* Miyabe, イバラモ *N. marina* Linn. の4種である。

以上4種の中でホッスモ・イトトリゲモの2種については「新日本植物誌」- 顕花編- で、北海道分布を欠いている。さらに、イトイバラモについては、同文献では北海道分布のみをあげているが、上野雄規 (1991) は、文献上で南限を青森県と示している。

角野康郎博士 (私信、1992) からは NAJADACEAE 2種の北海道分布につき次のように御教示いただいた。

①イトイバラモ- 釧路・苫小牧

②イトトリゲモ- 胆振

道産 NAJADACEAE のうち、イバラモは橋ヒサ子・伊藤浩司 (1980) により、弁天沼およびウトナイ湖 (ウトナイ沼) より分布が実証されており、筆者も弁天沼から再確認することができた。分布の濃淡はあれど、ウトナイ湖には現在も普通に分布しているものと思われる。

以上により現時点では道産 NAJADACEAE は4種分布することは確実である。本科の植物が今後北海道に何種追加となるかは未知であるが、上野雄規 (1991) が示しているトリゲモ *N. minor* All. (群馬・栃木・新潟・福島・宮城・岩手・青森の連続分布)、オオトリ

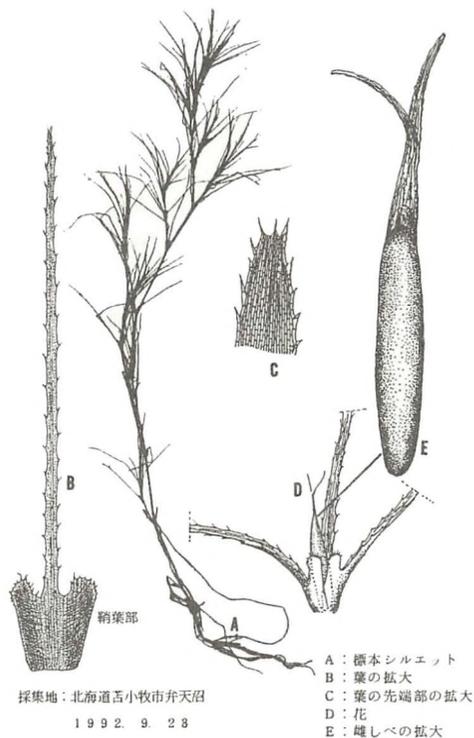


図2 弁天沼のホッスモ

ゲモ *N. oguraensis* Miki (茨木・群馬・新潟・宮城・秋田・青森の連続分布) の産地は、それらが北海道にも分布する可能性を大いに示唆するものと受けとめられる。

多様性に富む弁天沼の水生植物

弁天沼の概略については前述の通りであるが、1種の植物が広い面積を占める尾瀬沼とは、全く対照的な様相を示し、多種の植物が雑居する区域もまれではない。

はじめに示しておいたように、筆者はこれまでの踏査のほとんどを *Utricularia* の調査に費やしてきたため、それ以外の水生植物については多くを語ることはできない。本沼の詳細な調査については橋ヒサ子・伊藤浩司 (1980) 両氏によってまとめられた報告書を見ていただくことにして、本稿では折にふれてここで見てきた植物についてふれておきたい。

タヌキモ科- タヌキモ・コタヌキモ・ヒメタヌキモ・ムラサキミミカキグサ・シロバナミミカキグサ等で、コタヌキモは2種- 普通のコタヌキモとヒメタヌキモ×コ

タヌキモと思われるもの一が分布していて、後者は明らかに開花の生理も異なっていることを数年の観察からつかむことができた。

コタヌキモについては浅水型・深水型が見られ、垂直的に見ると水深2cm-1.5mまでの最深部まで見られる。最深部の深水型でもほとんどちぎれて浮上することはなく、地下部の補虫のうは大きい。

- アリノトウグサ科-ホザキノフサモ (多産する)
- スイレン科-エゾノヒツジグサ (極く普通に分布)
- ヒルムシロ科-エゾノヒルムシロ・リュウノヒゲモ
- オトギリソウ科-ミズオトギリ (普通に分布)

トチカガミ科-セキショウモ (極く普通に分布)・クロモ (少ない) ……後者は個体数は少ないが確実に分布することを確認している。

- オモダカ科-ヘラオモダカ (極く普通に分布)・アギナシ (少ない)

カヤツリグサ科-フトイ (北東岸部に群落あり)

スギナモ科-スギナモ ……個体数は少ないが、確実に分布すること確認している。東南岸に分布を確認。なお、かつてこの東南岸のヤチャナギ群落の中で本種の気中に産するものを見たが、現在は消失している。その状況まさに佐藤潤平 (1942) が示す

興安省満洲産の植生状況写真および線描画に相同のものであった。

おわりに

弁天沼の水生植物については、ほんの貧弱な観察を主に報告したに過ぎないもので、来年の本格的な調査によって全沼の水生植物を標本を付して報告することを予定しています。末筆になりましたが、本報告につき標本の同定、分布について種々お世話いただいた神戸大学教養部の角野康郎博士に心から感謝の意を表します。

文献

上野雄規 (1991) : 北本州産高等植物チェックリスト. 東北植物研究会.
 橘ヒサコ・伊藤浩司 (1980) : 勇払湿原の植物生態学的研究. 環境科学・北海道大学大学院環境科学科研究紀要 第4巻 第1号 別刷.
 大滝末男・石戸 忠 (1980) : 日本水生植物図鑑. 北隆館.
 佐藤潤平 (1942) : 満洲水草図譜. 三省堂.
 大井次郎・北川政夫 (1983) : 新日本植物誌 顕花編. 至文堂.

これは何ぞや-正体不明の水生植物

外山 雅 寛

北海道江別市八幡から正体不明の水生植物が採集された。外観はスケッチに示した通りで、これまでの既知日本植物のうちではイチョウウキゴケ *Ricciocarpus natans* (L.) Corda に最も近縁な植物と思われる。イチョウウキゴケはイチョウウキゴケ属 *Ricciocarpus* Corda 中で唯1種の既知日本産種で、保育社刊「原色日本蘚苔類図鑑」(服部新佐他)では、その分布(国内)は、本州-琉球となっており、大滝末男著「日本水生植物図鑑」では、「北海道」も含まれている。しかし、筆者は北海道では1度もこの植物に出会ったことがない。

数種の図鑑でイチョウウキゴケとの比較を行ってみたが、それと同1種の植物とはとても考えにくい。葉状体の基部より中心に濃紫色の太いすじが走り、途中で2又に分かれている。

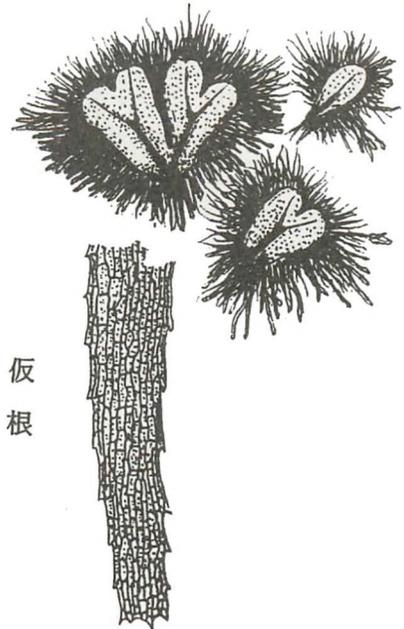


図 イチョウウキゴケに